『バージン・ブルース』

作・大池容子

登場人物

藤木博貴
赤石修二
彩子／闇原有太郎
式場係

舞台下手に、巨大なクローゼット。
その中にはモーニングスーツ、学ランなどの衣装が掛けられている。
舞台上手奥に、白いテーブルクロスが掛けられた丸テーブル。
その上に灰皿と白い手袋がひとつ。丸テーブルの傍に二脚の椅子。
丸テーブルから少し離れたところにも、一脚の椅子がある。
その上に、鞄が置いてある。鞄の下敷きになっている、白いネクタイ。
上手側に出入り口。客席の中央に花道。
開場中、劇場内の誘導係が観客に以下のアナウンスを行う。

誘導係　本日は『バージン・ブルース』にご来場いただき、誠にありがとうございます。携帯電話、時計のアラーム等、音の鳴る電子機器は予め電源からお切りくださいますよう、ご協力お願い申し上げます。……ありがとうございます。それでは開演まで、今しばらくお待ちくださいませ。

この誘導係は、式場係として劇中に登場する。
物語の進行と共に俳優によって舞台装置の配置が変えられ、舞台は様々な場所に変化する。

結婚式場・控え室（現在）

開演。
誰もいない結婚式場の控え室に、藤木博貴が入って来る。六十～七十代ぐらいの男。礼服用の黒のズボンを履いているが、シャツは私服のままである。
クローゼットの中の服をかき分けて、なにかを探している様子。
そこへ、モーニングスーツを着た赤石修二が入って来る。六十～七十代ぐらいの男。

赤石　おい。……まだかよ？
藤木　……ん？
赤石　いや、もう始まるぞ。
藤木　うん、わかってるんだけどね……
赤石　なに。
藤木　……ネクタイ知らない？
赤石　……え？　無いの？
藤木　……うん……

赤石　無いことないでしょ、探せよ。ちゃんと、
藤木　探した、探した。さっきから探してるよ。
赤石　もっかい。思い出してみ。最初っから。
藤木　……最初に、こう……こっから出しただろ……。それで、ここにまとめて……それからこっちに行って……（鞄の下敷きになったネクタイを見つけて）あった。ありました。
赤石　……あるじゃない。すぐあったよ。
藤木　ありましたありました。ありましたよー。
赤石　わかったから。急げ。ハリアップ。
藤木　わかってるって。
赤石　なんでおれが逐一お前に指示しなきゃいけないの？
藤木　はいはい、ごめんごめん。
赤石　はー、もう……

赤石、落ち着かない様子で丸テーブルの傍の椅子に座る。

藤木　なに。緊張してるの？
赤石　してませんよ。寝不足なの、
藤木　それ、緊張で寝れなかったんじゃないの？
赤石　違う！　お前が昨日、変なイビキかいてたせいで、一睡もできなかったの、こっちは。
藤木　えー？　うそだあ、
赤石　ほんとですう、
藤木　でも、おれだって、ほとんど眠れなかったよ？　今、ちょっと横になりたいぐらいだもん。……休憩させてくれないかなあ。……ちょっと小腹も減ってるんだよね。なんか軽く食べられるといいんだけど。食べ物とか置いてないのかね、こうゆう控え室って。普通、置いてあるんじゃないのかねえ？
赤石　ちょっともう、その話いいから。着替えて、とっとと。
藤木　……はいはい。……あら？　あらららら。
赤石　なになに、
藤木　ああ……どこ置いたっけな。
赤石　なにを。
藤木　手袋、
赤石　（テーブルの上の手袋を手に取り）ここ！　あるでしょ！　見えてるでしょ！
藤木　いやいや、それは分かってるんだけど。もう一個。
赤石　……なんで別にした？　なんで分けたの？　ふたつ一緒になってたでしょ？
藤木　なんでって言われてもなあ……
赤石　……もう！（立ち上がって手袋を探し始める）
藤木　（再び着替えを始め）……ちょっと、こっち見ないでね。
赤石　見ねえよ！

藤木、小学生の女子がプールで使う、体に巻くタオルを鞄から取り出し、それを体に巻いて服を脱ぐ。タオルにはキティちゃんがプリントされている。

赤石　……なに、それ？
藤木　これね、彩子が小学校の時使ってたやつ。水泳で。
赤石　そうゆうことじゃなくて。つける必要があるかって話。
藤木　だって……見られちゃうじゃない？
赤石　見ねえっつってるだろ！
藤木　いやいや、誰か入ってきちゃうとさ、アレでしょ？
赤石　（舌打ち）
・・・
赤石　無いぞ、手袋、
藤木　無いことないでしょう。
赤石　ひとに探させといて、その言い草は無いんじゃない？
藤木　でもこれ（タオル）、やっぱ小っちゃいねえ。小っちゃかったんだなあ……あいつ。大きくなったなあ……。
赤石　気持ち悪いな。しみじみすんな、そんなモンで。
藤木　ちょっと泣けてきちゃったよ、おれ。
赤石　早いよ！　あとにしてよ。
藤木　まさかなあ、こんな日が来るなんてなあ……。
赤石　早いって。せめてスピーチで泣け。
藤木　……ああ……スピーチかあ。……あるのかな、そうゆうの？
赤石　まあ……あるんじゃないの、やっぱり。
藤木　お父さん、お母さん、今まで育ててくれてありがとう、ってやつか。
赤石　うちは、お父さん、お父さん、だけどな。
藤木　だけどやっぱり、プロだよね、こうゆう……式場の人ってゆうのは。普通おかしいじゃない？　うちみたいなのって。でも、顔色ひとつ変えないね、彼らは。まあ、複雑な事情のところもあるだろうからなあ、慣れてるんだな。
赤石　ねえ。その無駄話やめて、とっとと着替えてくれない？
藤木　はいはい、

ウェディングドレスを着て、スマートフォンとタバコの入ったポーチを持った彩子が入ってくる。二十～三十代ぐらいの女。

藤木　おう、
赤石　お前、なにウロウロしてんだよ。
彩子　灰皿、あっち無かったんだもん、

彩子、ポーチからタバコを取り出し火をつけようとする。

赤石　それ着たまま吸うなよ！
彩子　えだって脱げないよ？
赤石　我慢しろ、タバコぐらい、
彩子　えー。
藤木　いいじゃないの、一服ぐらいさせてやっても、
赤石　お前は、黙ってさっさと着替えろ、
藤木　……なんか、きついよなあ、今日……。
彩子　（藤木のタオルを見て）……なにそれ、
藤木　これか？　懐かしいだろ？
彩子　え。キモい……。
藤木　あっそ、
赤石　おい。グズグズしてたら、もうお前抜きで始めるからな？
藤木　え？
赤石　結婚式。お前抜きでやってやるからな。
藤木　いやいやいや……おれがいないと始まらないでしょう。（彩子に）なあ？
彩子　あー。
赤石　おれがお前の分も、ちゃーんとバージンロード歩いてやるから。（彩子に）な？　いいもんな、それで。
彩子　そーだねえ。
藤木　ダメダメ！　お前はねえ、風情がないよ、父親として。
赤石　……なによ風情って。
藤木　なーんか、かっこつけちゃってさ。目に浮かぶよ、お前がバージンロード歩く姿が。こう、一見、サマになってるんだけど、情緒とゆうか風情が無いんだよなあ。その点、おれは……渋いぞー。哀愁漂うぞー。

藤木、そう言いながらキティちゃんのタオルを取る。
上半身が露わになる。その体には、形の良い、大きなオッパイがある。
赤石、振り向いて、

赤石　おれだってなあ……！（藤木の露わになった胸を見て）……なんで取った！　それ！
藤木　え？
赤石　なんで取った、キティちゃん！
藤木　だって彩子がキモいって言うから……
赤石　ビックリするだろ！　取るときは取るって言えよ！
藤木　そんな細かいことまで報告しなきゃいけないの……？

と、言いながら、藤木、椅子に座る。

赤石　座るな、座るな！　ああもう、時間が無いんだよ！

藤木　疲れちゃったんだよ。やっぱり寝てないからかなあ。
赤石　寝てたっつってんだろ！　ガアガア、ガアガア。やかましくて眠れなかったんだぞ！
彩子　うるさい、うるさい、
藤木　（彩子に）なあ？　今日うるさいよなあ、お父さん。
赤石　……もう、さっさと隠せ。それ。
藤木　はいはい……
赤石　なんのために着けたんだよ……
・・・
彩子　……（タバコの煙を吐き出す）
赤石　……お前も。なんか……もうちょっと、花嫁らしくできないの？　一生に一度のことなんだぞ？
彩子　え？
赤石　もうちょっとさあ、物思いにふけってみるだとか、あるでしょう？　なにをお前……平然と……
彩子　いいじゃん別に。色々思い出してるよ？　今、
赤石　スマホいじりながら？
彩子　いじりながらでも別に思い出したりできるから。
赤石　いや、だからね、そうゆうことじゃなくて。姿勢の話をしてるの、今は。
彩子　……は？
赤石　見たことあるか？　花嫁がさあ、タバコ吸って、それ……なんだ？　ラインか？　ラインとかチェックしながらさあ。なんかこー、精気のない顔してるとこ。見たことあるか？
彩子　こーゆうもんだって。
赤石　普通、普通な？　こうゆう時の花嫁は、言葉少なにしてるもんなんだよ。特に、父親とはゴチャゴチャ喋らないもんなんだ。控え室で、じっと座って、鏡とか見てるもんなんだよ。そーゆうのが物思いにふける、ってことなんだ。わかる？
彩子　知らないよ。てか、実物見たことあんの？
赤石　見たことあるとかないとか、そうゆうことを言ってるんじゃないんだよ。
彩子　さっきお父さんも、見たことあるかって言ってたじゃん。
赤石　ほんっとにお前、可愛くないねえ……そんなんだからお前は、いつまでも、
彩子　（藤木の方を振り返り）あれ？　……お父さーん？

座ったままの藤木、動かない。

赤石　……なにしてんだよ。着替えろよ。
・・・
赤石　……おい。……寝てんのか？（藤木の体を揺する）……おい。……おい！？
藤木　……ああ……大声出すなよ。
赤石　……びっくりしたあ。死んだかと思ったよ。
藤木　なんでよ。死なないよ。

赤石　急に動かなくなるなよ……
彩子　なに、ちょっと休む？
藤木　いや、いい、いい、
彩子　そ？
藤木　ふふ。……お前、やっぱり、こーやって見るとそっくりだなあ。
彩子　え？
藤木　いや、笑っちゃうけど……そっくりなんだよねえ、あいつに。あいつがウェディングドレス着てるみたいで、なんか……おかしいよな……

と、言いながら、藤木、椅子から崩れ落ちていく。

赤石　……あれ？　……どした？　おい。……おい。……ちょっと……え？　待ってろ！　すぐ戻ってくるから！

赤石、走り去る。
その場に立ち尽くしている彩子。
音楽。
客席に式場係が現れ、観客にアナウンスをする。

式場係　本日はご多用の中、ご参会くださいまして誠にありがとうございます。携帯電話、時計のアラーム等、音の鳴る電子機器は予め電源からお切りくださいますよう、ご協力お願い申し上げます。……ありがとうございます。それでは皆様、大変お待たせいたしました。間もなくチャペル後方より、新婦・彩子さんがお父様の赤石修二さまと、……お父様の藤木博貴さま、お二人のエスコートで入場いたします。

彩子、そのアナウンスを聞いて、慌てて客席の花道を通って退場する。

式場係　（彩子が出て行ったのを見送って）……入場いたします！　……（彩子が現れないので）……入場されないということで、ご準備が整うまで、お父様・藤木博貴さまの走馬灯を、ダイジェストでご覧いただきます。

藤木、目を覚まして、自分の走馬灯を眺めるように、舞台上を見回している。

式場係　（藤木に）どうぞ、

式場係、藤木をクローゼットの前に連れて行き、学ランを着せて学帽をかぶせる。
式場係も学帽をかぶり、生徒会長（金澤）を演じる。
これから舞台上で起こることは、全て藤木の走馬灯である。

中学校・裏庭（過去）

式場係　悪かったな、こんなところに呼び出して。
藤木　いや……
式場係　藤木。おれはいつも、お前がクラスでいじめられてるのを見てた。クラスメイトに毎日毎日殴られて……そんな日々に耐え続けるお前を、おれは心を痛めながら見てたんだ。
藤木　金澤くん……。
式場係　だから藤木。生徒会長としてお前に言う。……この学園を辞めてくれ。
藤木　えっ！　ど、どうして？
式場係　……どうしてって……分かるだろ。君みたいな出来損ないは、この学園にふさわしくないんだ。
藤木　ええ？
式場係　エリートが集まるこの学園に、そんなオッパイをした奴がいるなんて……生徒会長としても、見過ごすわけにはいかないんだ。みんなの総意だよ。
藤木　ちょっと待ってよ、助けてよ、生徒会長でしょ？　金澤くん……！（と、式場係に縋り付く）
式場係　……汚い手で触るんじゃねえ！

生徒会長に扮した式場係、藤木を何度も殴り、蹴る。
藤木、その場に倒れる。

式場係　……このオッパイ野郎！

と、吐き捨てて、式場係いなくなる。
うずくまったままの藤木。
周りを警戒しながら、学ラン姿の赤石が顔を出す。

赤石　……おい。大丈夫か、
藤木　ああ、うん……なんとか……
赤石　ちょっと、見せてみろ、
藤木　いいよ、平気だって、
赤石　いいから。見せてみろ。

赤石、藤木の服を脱がせて、傷の具合を見てやる。

赤石　しっかし、毎日毎日……よく我慢できるな……。
藤木　いいんだ、もう慣れたから……
赤石　慣れたっつってもお前……

赤石が藤木の服を脱がせると、形の良いオッパイが現れる。

赤石　……

赤石、我慢できずに藤木のオッパイを揉みしだく。

藤木　ああ修くん、修くん！
赤石　悪い。あるとつい、な……
藤木　もう何回も見てるでしょ？　我慢してよ。
赤石　悪い悪い。本能だよ。目の前にあったから。
藤木　最近張ってきて痛いんだからさあ……
赤石　（藤木の傷を見て）うわっ。ひっどいな、これ……
藤木　そう……？
赤石　これ、あれだろ？　さっき、あの、いけすかねえ野郎が、こう、倒れたお前のココんとこにバーン！　って蹴り食らわせたやつでしょ？　おれアバラ、二、三本いったかと思ったよ。
藤木　見てたんなら助けてよ。
赤石　藤木、それじゃ意味ないんだって。言ってるでしょ？　お前の手でやり返すってゆうのが大事だって。おれが代わりにあいつらやっつけったって、復讐にならないの。わかる？
藤木　どうすりゃいいのさ……
赤石　だから……例えばあいつらの席に、画鋲をこっそり置いておくだとか……
藤木　やだよ、そんなみみっちいの、
赤石　だったら自分で考えろ。……おれ、もうヤだよ。ずっとお前の面倒ばっか見てきて。……ガキの頃のお前が、あんなじゃなければね、おれだってお前にここまでしてやらなかったよ。あんな高っかい声して、フリッフリのスカート履いて。修くん修くんなんて言うからさ。誰だって、か弱い女の子だと思うだろ。
藤木　しょうがないでしょ、女の子欲しかったって親が言うから、
赤石　反抗しろよ、女のカッコなんかしたくないって。
藤木　……まんざらでもなかったんだ、おれだって。……だって、おれ……可愛かったでしょう？　……可愛かったんだよ、おれは！
赤石　……たしかに……お前は可愛かった。ガキの頃のお前はクラスの女子の誰よりも可愛かった。それが今じゃ……。なんだ！？　なんでこうなった！？
藤木　知らないよ！
赤石　なに食ったらお前……。お前ほんとに中学生か？
藤木　それはお互い様でしょ、
赤石　おれは……いるだろう、ギリギリ。こうゆうのも、
藤木　もういいよ。ほっといてよ。なんでそんなに、おれに構うんだよ。もういいでしょ？
赤石　ホントの女にモテてんだからさ。
藤木　いいや、おれは、この年にして女ってもんに愛想が尽きたんだ。あいつらの目当ては、おれのこのカラダなんだ。学級委員の佐々木も、陸上部の宮下だってそうだ。

あいつらの考えてることはセックスだけだ。

藤木　……いいよなあ、お前は。おれ、こんなんじゃ一生女とセックスなんかできないよ。ヤでしょ？　自分よりも巨乳の男とセックスするなんて。自信なくしちゃうでしょ、こんなに大きくて形のいいオッパイがあったら……

赤石　だったら隠せ。ブラでもしとけ。

藤木　え？　逆効果じゃない？

赤石　うるさい！　もう、好きにしろ、

藤木　ああ……

赤石　……で？　どうすんだよ、

藤木　いや、でも結構高いって聞くからな……

赤石　ブラのことじゃない。あいつらのこと。これから中高六年間、いじめられ続けるって考えてみろ？　いいのか、それで。

藤木　いいんだよ、もう……

赤石　なに？

藤木　もういいんだって。納得してるから、おれ自身。……そりゃあ、いじめられるでしょう？　こんなカラダの奴がいたら。いじめるなって方が、どうかしてるよ。

赤石　諦めるなよ、お前、

藤木　諦めてるわけじゃない。

赤石　……あ？

藤木　おれはな、気付いたんだ。

赤石　……なに？

藤木　いじめてくるあいつらのこと、他の、関係ないって顔してる奴らのこと、おれはじっと見てた。授業中も、休み時間も。息を潜めてあいつらのことを観察してたんだ。それで気付いた。みんな、どこかおかしなところがある、ってな。オッパイがあるおれだけじゃない。二組のマドンナ、中川さんの足の指は六本あるし、四組の田山くんは満月になると女を襲いたくてたまらなくなる。もちろん、お前も、どこかおかしいはずなんだ……。

赤石　おい、やめろよ、

藤木　まあまあ、お前のことはいい。……おれは六年かけて、この学校にいる生徒全員のおかしなところを見つけてやる。お前たちも、おれとおんなじ出来損ないだろう、って言ってやるんだ。それがおれの復讐だ。

赤石　おいおい、なんだそれ、

闇原　（声のみ）……驚いたな。

赤石　……誰だ？

いつの間にか、高い場所から二人のことを見下ろしていた、彩子そっくりな男・闇原有太郎。闇原も学ラン姿である。

闇原　おれと同じことを考えてる奴がいるなんて、驚いたぜ。

赤石　お前……三組の闇原か？

闇原　やめてくれよ、そんなつまらない名前で呼ぶのは。そうだな……ブラック……おれのことは、ブラックと呼んでくれ。（と、降りてくる）

赤石　はあ？　お前、闇原有太郎だろ？　一昨日、生徒会に入ったってゆう……、

闇原　嬉しいね、おれのことを知ってくれてるなんて。だけどバーミリオン。その名はよしてくれ。次に呼ぶ時は覚悟しな。おれは君の秘密だって握っているんだぜ？

赤石　あ？

闇原　女泣かせのバーミリオン。佐々木さんも宮下さんも、君のカラダの秘密にゾッコンらしいじゃないか、

赤石　なんだと……？

藤木　なあ、バーミリオンってなんだ？

闇原　いい質問だウィスタリア。おれたちは今からコードネームで呼び合うんだ。

赤石　ややこしいな。覚えらんないよ、そんなの。

藤木　なあ。闇原有太郎って……お前、有ちゃんじゃないか？

闇原　……えっ？

藤木　そうだ。有ちゃんだ。おれだよ、おれ。分かんないか、ほら……よく幼稚園でお人形ごっこしただろ？　こっち帰ってきてたんだな。……覚えてない？　有ちゃんよくションベン漏らして泣いてただろ、「泣き虫有ちゃん」って言われてさ、おれよく鼻水拭いてやったじゃない、

闇原　シット！　その名を呼ぶなウィスタリア。おれはもう、過去の名は捨てたんだ。

赤石　せめてもうちょっと短くしないか、

闇原　いいか、烏合の衆。おれは特別な人間なんだ。知っての通りおれは君たちと同じ一年生。だけど一昨日、委員会の主要メンバーである書記に選ばれた。成績優秀、文武両道、美白美麗。おれは完璧な人間なんだ。

赤石　気に食わねえ奴だな……。

闇原　しかしラッキーだったな、ウィスタリア。君は目の付け所がいい。君が辛抱強く彼らを観察し続けたことで、交わることのない我々の人生が、初めて交差したのさ。ちなみに……おれはもう、ほとんどの生徒のおかしなところを、ここ（頭）にインプットしたぜ。

藤木　すげえな、ブラック。

闇原　ああ。しかし、ここで新たな疑問が生まれてしまった。この学校に通う連中すべてに、おかしなところがあるとしたら……どうしておれはここにいる？　ひとつも欠点のない、完璧なこのおれが、どうしてこの学校にいるのか……わかるか、バーミリオン。

赤石　やめろバーミリオンって言うの、

闇原　恐ろしかったさ。もしかしたら、おれにも自分では気付いていない、とんでもない欠陥があるんじゃないかってな。……だけど違った。おれはある答えにたどり着いたんだ。

赤石　なんなんだよお前は……

闇原　おれがここにいるのは、この学校を支配するためなんだ。

赤石　……あ？

闇原　だって、そうとしか考えられない。ここにいる出来損ないを支配・統率するのがおれの役目。……どう考えたってそうだ、違うか？
赤石　バカかお前、
闇原　なんだと？　おいもう一度言ってみろ。
赤石　どんだけバカなこと言ってるか自分で分かんねえのか？　救いようのないバカだな。
藤木　やめろよ、バーミリオン！
赤石　バーミリオンって言うな！
闇原　……いいだろう。ならば、見てるがいい、一週間も経たないうちに、おれは一年にして生徒会のトップに上り詰めてみせる。そう、この学校の奴らの弱みを握るのは簡単なことなんだ。おれは書記に収まっているような器じゃない。それを分からせてやるんだ。まもなく、おれは生徒会長と呼ばれて、この学校を支配する立場になるぜ。
赤石　……もう行こうぜ、藤木。
藤木　えっ。
赤石　時間の無駄だよ。こいつ、ただのバカだ。
藤木　や、でも、
闇原　バーミリオン！　このおれに楯突くとは、いい度胸だ。気に入ったぜ。
赤石　お前、それらしいこと言いたいだけだろ。
闇原　提案だ。お前ら、おれと組まないか？
赤石　は？
闇原　本来なら君たちみたいな最下層の奴らに、こんなチャンスは巡ってこない。おれにつけば、お前たちにも生徒会でいいポストを与えてやるぞ。……おれは君たちを救う、ヒーローなんだ。
赤石　……
闇原　考えてみろ。生徒会に入れば、女たちの見る目が変わるぞ。お前ら、尊敬されるってことが、どれだけ気持ちのいいものか知らないだろう？　バーミリオン、君は言い寄ってくる女たちに、不満を感じているんだろう？　それはお前が尊敬される、ってことをまだ知らないからなんだ。……そしてウィスタリア。こんな毎日から抜け出したいと思わないか？　お前は復讐を夢見た、だが、それだけでいいのか？　本当に満足か？　……その先を、見てみたいとは思わないか？
藤木　ああ……
闇原　それにはまず、現・生徒会長の不正を暴き、彼を失脚させるんだ。
赤石　なんだって？
闇原　奴のやっていることは恐怖政治だ。暴力で何でも解決しようとする。アイツの欠点は、オツムが少々足りないことさ。
赤石　だ、だけどあいつ、表向きは真面目な生徒会長様だぜ？
闇原　叩けば埃は出てくるさ。出てこないのなら、作ればいい。
赤石　なんだと？
闇原　例えば……ウィスタリアが奴を呼び出し、学園を辞めたくないと言えば、奴の頭に血がのぼるはずさ。

赤石　ふ、藤木を囮にするってのか？！

闇原　（どこからかカメラを取り出し）なあに、現場を押さえればすぐに助けてやるさ。……どうだ、いい話だろう？

藤木　……

闇原　写真がバラ撒かれれば、彼の評判はガタ落ち。会長なんか続けていられなくなる。そして空白となった会長の座につくのは、このおれだ。どうだ、手伝ってくれないか？

赤石　……ううむ。

闇原　それだけで君たちは、その鬱屈とした日常から抜け出せるんだ。……いいか。僕は、君たちを救う、ヒーローだ。

藤木、顔を上げ、闇原に向かって大きく頷く。

音楽。

ある日の放課後、式場係を呼び出す藤木。

赤石と闇原は物陰から見ている。

式場係が現れ、藤木と話をするうちに、苛立ってくる。

式場係が藤木に手を上げた瞬間、闇原がカメラのシャッターを切る。

式場係　な、き、貴様……！

式場係、闇原に殴りかかるが、闇原はヒラリとかわして、式場係をねじ伏せる。

生徒会長、学校中の非難を浴びながら退場する。

藤木　（客席に）宣言通り、ブラックは生徒会の長に上りつめ、中高六年間、生徒会長を務め上げました。そしてブラックといるだけで、僕らにも生徒たちから羨望の眼差しが向けられるようになったのです。彼は、本当に僕のヒーローになりました。女の子として育てられたせいか、僕はずっと、男らしいヒーローに憧れていました。七色仮面、エイトマン。憧れていたヒーローが目の前に現れたのです。

高校・放送室（過去）

赤石　しっ！　静かにしろ！　うるせえよ。

藤木　ああ、ごめん！

闇原　大丈夫、誰もいやしない。

赤石　しっかし、いいのかよ？　生徒会長がこんなところに忍び込んで。

闇原　なに、学校生活ももう終わりだ。最後に思い出づくりといこうじゃないか。

赤石　でもなあ。

藤木　（客席に）ブラックの傍にいると、僕は心臓の高鳴りが抑えられなくなります。このオッパイのその奥の、僕の小さな心臓が、ドクドクと脈打つのを感じるのです。今思えば、この気持ちは、恋に近いものがありました。

闇原　心配いらない、これがバレたって、おれたちの評価が下がることはない。むしろ逆だ。会長だからって規則に従うだけじゃない、最後にこんな洒落たことをしてくれた、ってみんな言うはずさ。

赤石　そこまで計算づくってわけか。

闇原　そう。学校に流れる音楽が、いつもクラシックじゃつまらないだろう？　生徒たちは、こうゆう刺激を求めているのさ。

闇原、レコードを針にかける。

藤木　これ、なんて曲だ？

闇原　ピーター・ポール＆マリーの『天使のハンマー』さ。

藤木　英語はわかんねえけど、きっといい歌なんだろうな、

赤石　……なあブラック？　この鍵が無きゃあ、放送室に忍び込むなんてことは不可能だったんだぜ。そこんとこ、分かっといてくれよ？

闇原　ああ、さすがバーミリオンだ。（ポケットからなにかを取り出し）取っておけ。

赤石　なんだ？

闇原　学食のＡセットの食券だ。

赤石　……ちっ。しけてんなあ。……あのなあ、おれが、これを手に入れるためにどれだけ苦労したか、わかってるか？

闇原　わかってるさ。放送部顧問・松下直美。あの女からだろう？

赤石　知ってやがったか。

闇原　ああ。週二で密会を重ねていたことも知っているさ。よく我慢したな。あの女と一晩過ごすのは、なかなか勇気がいるぜ。

赤石　そこまで分かってるんなら、もう少し報酬を弾んでくれてもいいんじゃないか？

闇原　そうだな、じゃあ……十枚綴りでどうだ？

赤石　……良しとしよう！

闇原　……なあ、ウィスタリア、バーミリオン。君たちには感謝している。卒業して、君たちと離れるのは、とても寂しい。

藤木　……ああ、おれもさ……！

赤石　なんだよ改まって。

闇原　……おれは大学に行こうと思う。

藤木　え？

闇原　二本松大学医学部。おれはそこに行く。

藤木　医学部？

闇原　ああ。……たしかめたいことがあるんだ。

闇原、去る。

藤木、赤石、学ランを脱ぎ捨てる。

大学構内（過去）

バリケードが張られた大学構内に立てこもっている赤石と藤木。
ヘルメットをかぶって、ゲバ棒を持っている藤木。
その傍で煙草を吸っている、赤石。

赤石　……うるさいなあ、お前は。グチグチ、グチグチ……。
藤木　聞いてくれ。おれはね、まず事実確認できればそれでいいの。昨日お前がどこにいたかって、それだけ、もっかい聞かせてくれよ。
赤石　だからあ、ずっと、ここにいたって言ってるでしょ？
藤木　本当か？　本当にずっと、ここにいたか？
赤石　こんな大事な時に、サボってどっか行くわけないでしょう？
藤木　本当かよ……。
赤石　おう。……ちゃーんとここで、バリケードの警護、してましたよ？
藤木　なら、ブラックが言ってることが嘘になるぞ。
赤石　じゃ、そうなんじゃないか？
藤木　そんな嘘ついてどうするんだよ。
赤石　なら他人の空似だよ！　いくらでもいるでしょ、おれみたいな学生なんか。
藤木　黒乳首に行く奴なんか、そういないだろう、
赤石　そうかあ？　いいぞお、スナック・黒乳首。
藤木　なにがいいんだよ。あんなバアさんばっかのとこ行って、なにが楽しいんだ？
赤石　わかってねえなあ。あの、枯れ木の窪みみたいな目ん玉にね……こう、忘れかけてた女の火が灯る瞬間があるんだよ。……ああ……たまんねえ。
藤木　お前、一周回っておかしなとこ行っちゃってないか？
赤石　ほっとけ、
藤木　なあバーミリオン、頼むよ。おれブラックのこと裏切りたくないんだよ。ホントのこと言ってくれよ……
赤石　なに。おれよりもブラックを信じるってこと？　お前はなんかあったらブラックが、ブラックが、って言うけどな。これまで、ずーっとお前の面倒見てやったのは誰だ？
藤木　ブラックか？　おれか？
赤石　バーミリオンには感謝してるよ……。
藤木　どーすんだよ。ブラックのこと追っかけて大学まで入っちゃって。哲学科なんか出てどーすんだ。
赤石　お前だって哲学科だろ。
藤木　……あのねえ。おれは、お前のこと心配して付き合ってやってるの。おれ、人生の半分以上はお前の面倒見てやってるよ？　わかってる？　……それをお前、昨日どこにいただの、サボってたんじゃないかだの、グチグチ、グチグチ……
赤石　……だってお前は、デモの時も、十メートル歩いただけで飽きちゃってさ、全然知らない奴にヘルメットと角材押し付けて、黒乳首に行っただろう。
藤木　あー、もういい。この話おしまい、
赤石　え？

赤石　終わり終わり、うんざりなんだよ、もう、
藤木　バーミリオン、お前、本当にやる気あんのか？
赤石　……あ？
藤木　この闘いはねえ、そんな、煙草吸ってお菓子食いながら、ダラダラやるようなことじゃないの。
赤石　大げさだねえ。センセイの数増やせとか、授業料下げろとか、しょうもないことしか主張してないじゃないの、
藤木　しょうもないことじゃない！
赤石　こんなバリケード張って、大学入れなくしちゃってさあ。サバエちゃんも言ってたぞ昨日、
藤木　え？
赤石　せっかく大学入ったのに、全然授業できなくなって、可哀想ね、って。ほとんどの学生にとっちゃ、迷惑な話よね、って。
藤木　……おい、サバエちゃんって誰だよ。
赤石　黒乳首一番のベテラン、サバエちゃんだよ。御年六十六歳。
藤木　やっぱり行ったんじゃないか、黒乳首に！
赤石　……。
藤木　いい加減にしてくれよ。……あと六十六歳は女じゃねえよ。
赤石　なんてこと言うんだ！　サバエちゃんに！
藤木　ああ、やっぱりブラックが正しかった……
赤石　……なあ、だけどよ、どうしてブラックは昨日、おれが黒乳首にいるのを知ってたんだ？
藤木　……え？
赤石　あいつがおれのこと見たってことは、あいつもここにいなかった、ってことになる。
藤木　それは……
赤石　そうじゃないか、だろ？
藤木　いや、まあ、あいつにもそうゆう時だってあるだろう……。
赤石　ああ？
藤木　少しは休ませてやってもいいだろ。今まで、ずっと頑張ってきたんだから……。
赤石　なんでブラックには、そんなに甘いんだよ。
藤木　あいつはお前とは違うんだよ。
赤石　気持ちわりぃ。ブラック、ブラックって……お前ホモか。
藤木　……ふん。……ひとのこと言えんのか……。
赤石　……あ？
藤木　知ってんだぞ。……先週、お前とブラックがどこに行ったか。……お前、ババアだけじゃなくて男もいけるんだな。
赤石　はあ？　……なに言ってんだ、お前。
藤木　お前、円山町のホテルにブラックと行っただろ？
赤石　はっ、なんだそれ。冗談きついぜ、藤木。
藤木　おれは、お前の性癖にとやかく言うつもりはないよ。だけど、こんな大事な時に、

ブラックを巻き込まないでくれよ。あいつは、この闘いに賭けてるんだ。勝つために、全てを注いでるんだよ。邪魔しないでくれよ。

赤石　言っとくけどねえ。こんなことやったって、無駄なんだよ。機動隊に突入されたら、こんなもん、すぐ終わりだよ？　いっくらバリケード張ったって、あいつらジュラルミンの楯なんか持ってるからね、一発だよ。一発。

藤木　……大学だって、機動隊は入れたがらないよ。ブラックもそう言ってた……

闇原、酒瓶を持ち、白いハンカチで汗を拭きながら現れる。

闇原　やあ、諸君。やってるかい、

赤石　お？

藤木　……ブラック……？

闇原　毎日毎日、ご苦労様です。最後の最後まで、闘うぞー！　……くくく、男の闘い……美しいねえ。かっこいいよ、お前ら。

藤木　ブラック、お前、飲んでるのか？

闇原　ふふ、少しばかりな。

赤石　なんだよ、珍しいじゃねえか。おい、おれにもくれよ。

闇原　ああ、いいだろう、

藤木　ちょっと待ってくれよブラック！　なにしてるんだよ。お前……こんな時に酒なんか飲んでる場合じゃないだろ？　どうしちゃったんだよ……。

赤石　なんだよ？　おれは、嫌いじゃないぜ、こうゆうの。やっとコイツと腹割って話せるような気がする。

藤木　ブラック、どうした？　何があった？

闇原　いいんだ、もう。なにもかも。すべてが、どうでも良くなったんだ。

藤木　ブラック……？

闇原　……なあ、覚えてるか、中学の時、初めておれたちが話をした日を。

藤木　え？

闇原　言っただろう？　あの日。学校にいるすべての生徒たちにおかしなところがあるって。……そして、おれにもなにか、自分では気づいていない恐ろしい欠陥があるんじゃないか、って。

藤木　ああ……覚えてるけど……

闇原　……やっと分かったんだよ、おれのおかしなところが。くくく、笑っちまうなあ！　本当に一番おかしいのは、おれだったんだよ！　ははは、

藤木　待てよ。お前は、欠点のない、完璧なヒーローなんだろ？　だから学校の奴らを統率してたんだろ？

闇原　いいや、違う。……あったんだ、やはり、おれにも。正常な人間とは違う、おかしなところがな……

藤木　え……？

闇原　……ふふふ。もういいんだ。なにもかも。この闘いも、おれの人生も、すべてがどうだっていい。……なあ、藤木。赤石。……歌わないか。

突如、戸川純の『バージン・ブルース』が流れる。
闇原、クローゼットからマイクを取り出し、歌う。

藤木　え？
赤石　（客席の方を見て）……おい、なんだ、あれ？
藤木　え？
赤石　こっちに集まってくる……あれは……機動隊じゃないのか？
藤木　まさか。そんな……
赤石　まずいぞ、ほんとに突入されちまう！
藤木　え？
赤石　抑えろ、藤木！
藤木　ああ……！　……ブラック……？　なにやってんだよ、ブラック……！

赤石と藤木、機動隊を構内に入れないようにバリケードを押さえる。

闇原　（歌うのを止めて）……ウィスタリア、バーミリオン……やっと分かったんだ、おれのおかしなところが。
藤木　は？
闇原　おれ……子どもが出来たんだ。
赤石　なんだと？
藤木　それのどこがおかしなところなんだよ、
闇原　……このおれの腹の中に子どもがいるのさ。傑作だ。男が妊娠するなんて。やっぱり、おれも出来損ないだったんだ！　正常な人間じゃなかったんだ！
藤木　ブラック……！

一瞬、藤木の走馬灯が途切れ、現在に戻る。
さっきまで闇原が立っていた場所に、彩子がいる。

彩子　……お父さーん？
藤木　ああ……彩子か？
彩子　……お父さん、なにしてんの？
藤木　ああ……なにしてるんだっけなあ、
彩子　結婚式、もう始まっちゃうよ？
藤木　そうだそうだ、結婚式だったな。すっかり忘れてたよ。
彩子　えー、
藤木　ごめんごめん、
彩子　……そろそろ起きてよ。バージンロード、歩いてくれるんでしょ？
藤木　ああ、そうだなあ……でも、もう起きらんないかもなあ。
彩子　え？

藤木　だってこれ、走馬灯見ちゃってるんだもんなあ。
赤石　おい、藤木！　危ないぞ！
彩子　（客席にマイクで）本日は、私たちのためにたくさんの方にお集まりいただき、ありがとうございます。お父さん、お父さん。これまで、育ててくれてありがとう。お嫁に行っても、私はお父さんたちの娘です。

彩子、去る。
音楽がゆっくりと消えていく。

赤石　（客席に）……あれ以来、ブラックの姿を見た者はいませんでした。
藤木　……え、え？
赤石　運動に参加した何人かは逮捕されましたが、おれたち三人はどうにかパクられずに済みました。ただ、ブラックは二度と大学に戻っては来ませんでした。……おれは、あの日のブラックが、これまで見た彼の中で一番人間らしいような、そんな気がするのです。
藤木　ちょ、ちょっと。ストップ。
赤石　なによ。
藤木　これって、おれの走馬灯だろ？
赤石　ああ、そうだけど？
藤木　なんでお前が喋ってるんだよ。取るなよ、おれの……モノローグ。
赤石　なんだよ、いいじゃねえか。おれだって喋りたいんだよ。
藤木　えー。おかしくないかあ？
赤石　うるせえ。ここからはおれの番だ。（客席に）……おれたちが大学を卒業、というか、追い出された年は、高度経済成長の真っ只中。贅沢を言わなければ就職先はいくらでもありました。……おれは、小さな材木屋に就職し、営業先の経理の女の子を好きになりました。美人でもなく、ブスでもなく……唯一の取り柄と言えばオッパイが大きいことぐらいの、地味な女です。……彼女と結婚した翌年、突然、藤木から「会わないか」と電話が掛かってきたのです。

喫茶店（過去）

赤石のモノローグの間、藤木と赤石はスーツに着替える。
藤木は喫茶店の椅子に座って、赤石が来るのを待っている。
赤石、店に入ってくる。

藤木　おう、こっちこっち。
赤石　おお……うわあ、お前変わんないねえ……。
藤木　そうか？　いやー、悪いね、急に。
赤石　や、まあ、いいんだけどさ……。何なんだよ、いきなり？
藤木　ふふ。そんなカッコしてると、お前もちょっとはマトモに見えるな。

赤石　うるせえ。ずっとマトモだよ、おれは。
藤木　……アイスコーヒーにしようかなあ……。
赤石　で？　……なんだ、話ってのは。
藤木　まあ、その前にバーミリオンも注文しろよ。
赤石　こんなとこでバーミリオンって言うな。
藤木　ああ、ごめん。……でもほんと、久しぶりだなあ。すっかり社会人になっちゃって……。なんか、そっちは景気いいみたいじゃない、
赤石　そうでもないぜ。材木なんか今、売れないからね。資材置き場潰して、貸しビル業でも始めようか、って話になってるよ。
藤木　ああ……大変なんだな、色々。
赤石　（店の奥に）すいませーん。アイスコーヒーふたつ。

店の奥から、式場係扮する店員の声。

式場係　（声のみ）はーい。
藤木　……あー……最近、誰かと連絡取ったりしてるのか？　大学の奴らとかさ、
赤石　いや、全然。まあ結婚したとか子どもが生まれたとかは、よく聞くけどね。忙しいでしょう、みんな。
藤木　そうみたいだねえ。
赤石　ブラックはあれからどこ行ったか分かんなくなっちまったし……。お前、あいつのこと、なんか聞いてるか？
藤木　……あー……いや？
赤石　赤ん坊はさすがに堕ろしたんだろ？　まあ、男のケツから生まれた赤ん坊なんか、どんな人生送るか目に見えてるもんなあ。

式場係がコーヒーを運んでくる。

式場係　お待たせいたしました。
藤木　ありがとう、
式場係　……

式場係、藤木の顔をじっと見る。

藤木　……何か？
式場係　……いえ、ごゆっくりどうぞ。

式場係、慌てて舞台奥のテーブルを拭くなどの作業を始める。

赤石　……で？　お前は今どうなんだ？　……相変わらず、まだ新品なわけ？
藤木　え？

赤石　女と、まだ一回もヤッてないのか？　……さすがにお店のお姉ちゃんぐらいは、いったか？　さすがにな。
藤木　いや、まあ、おれのことはいいよ……。
赤石　あ？
藤木　まあ、ちょっと、今からする話にも関係あるっていうかさ……。
赤石　……あっそう。なら、そろそろ、要件、聞かせてくれよ。先に言っとくけど、金は無いぜ？　お姉ちゃんにいっぱい使っちゃってるから。
藤木　金のことじゃないよ……ちょっと、外に待たせてるから……待ってて、（と立ち上がる）
赤石　え？
藤木　彩子、おいで。（と、出口の方へ呼びかける）

幼稚園の帽子などをかぶった、幼い彩子が現れる。

赤石　な……？！
藤木　ほら彩子、「こんにちは」は？
彩子　……。
藤木　ごめんね、おれに似て、ちょっとシャイなの。話ってのは、この子のことなんだけどさ。……なんていうか、その……何日か、この子、預かってくれないか？
赤石　ちょ、ちょっと待て……どういうことだ？
藤木　いや、恥ずかしい話だけど、女房に逃げられちゃって。困ってるんだよ。
赤石　にょ……！？
藤木　いつもはね、隣近所に預けたりしてるんだけど。……どうしても頼める人がいなくってさあ。
赤石　いや、待て、女房ってのも気になるけど……このガキは何だ？
藤木　だから……おれの娘だよ。
赤石　はああ！？　嘘つけよ！
藤木　いや、ホントだって。
赤石　お前がマトモに嫁さん貰ったり、ガキ作ったりできるわけないだろ！　そんなオッパイで！
藤木　ひどいな、お前……。
赤石　いや、待って……待ってくれ。ちょっと確認したいことが山ほどある！
藤木　うん？
赤石　こいつ、こいつの顔……どう見たって、ブラックそのものだ！　いくらなんでも、そっくりだ！
藤木　……そおかなー？
赤石　とぼけんな！　こいつ、あん時ブラックが孕んだガキじゃねえのか。
藤木　いやいや、まさか。
赤石　なんでお前が育ててるんだ？　お前、まさかブラックと……！
藤木　違うよ！　おれは……何もしてない……。

赤石　おれ「は」って言うな！　……おれだって、なんにもなかったんだから……。
藤木　なあ、頼むよ、二、三日でいいんだ。預かってくれよ。
赤石　無理に決まってるだろ！　嫁さんに何て言えばいいんだ……！
藤木　友達の子ども、預かったって言えばいいじゃないか。普通のことだろ？　なに、うろたえてるんだよ……。
赤石　うろたえてねえよ！
彩子　……ねえ、やっぱり、いいよ。ウィスタリア。
藤木　うん？
彩子　わたし、お留守番ぐらい、一人でできるよ。
藤木　いや……でもなあ……。出張だから、おれ二、三日、いなくなっちゃうんだよ？
赤石　待て。今、ウィスタリアって言ったか？
彩子　だって、バーミリオン、なんか迷惑そうにしてるよ。
赤石　やめろ、その面でバーミリオンって呼ぶの……！　声から何までそっくりじゃねえか……。
彩子　ご飯だって自分でどうにかできるし、戸締りちゃんとするから大丈夫だよ。
藤木　彩子、お前が賢いのは分かってるよ。だけど、お前まだ五才なんだよ？　五才の子ってのは、普通、二、三日も一人暮らしなんかできないんだよ。
彩子　彩子はできるよ。……彩子、欠点とか無い完璧な五才だから。
赤石　ブラックと同じようなこと言ってるじゃないか……！
藤木　うるさいなあ。大声出すなよ、こんなとこで。
赤石　大声出させてんのはお前らだ！　……ああ、ちょっと待ってくれ……まさか、お前がここまでイカれてるとは思わなかったよ。
藤木　なんだよ、それ……。
赤石　いいか、どうゆうつもりか知らねえけどなあ、こんなガキ育てたって、こいつ、どうしようもねえ人生送るに決まってるだろ。
藤木　なに？
赤石　ケツから生まれて、オッパイのあるお前に育てられて、マトモに育つわけないだろう……！　出張って言ってたけど、お前、何の仕事してるんだ？　……どうせマトモな仕事になんか就いてねえんだろ？　カッコつけてんじゃねえよ。お前は出来損ないなんだ、そして、ブラックもおんなじように出来損ないだったんだ、いい加減、理解しろ！
藤木　お前……！
赤石　目ぇ覚ませよ。こいつ育てたって、お前の人生が救われることなんか無いんだよ……。こんなガキ、ブラックに突っ返してやれ！
・・・
藤木　……死んだよ。ブラックは、
赤石　……なに？
藤木　……お前の言う通り……彩子は、ブラックが産んだ子だ。ただ、ケツから産まれたんじゃない。この子は……前から産まれたんだ。
赤石　なんだと？

藤木　壮絶な出産だったよ……後にも先にも見たことがない、あんな形に膨れ上がった男のアレは……。赤ん坊とはいえ、人間一人、あの穴を通って出てくるんだからな。出産の痛みに男が耐えられないってのが、あれでよーく分かったよ……。

赤石　ま、待て、お前……立ち会ったのか！？

藤木　ああ。大学の付属病院にお願いしてな、極秘で入院してたんだ。おれもブラックも、覚悟はしてたよ。相当危険な出産になる、ってな。

赤石　……。

藤木　陣痛が始まってから、一週間……やっとのことで彩子が産まれたよ。……だけど、ブラックのペニスは……想像を絶する大きさに膨れ上がって、先っぽからこの子が飛び出すと同時に、粉々に砕け散った……。結局、出血が酷くて、ブラックは助からなかったんだ。

赤石　……くそっ……なんで、帝王切開にしなかった……！

藤木　……でも、あいつ、カッコ良かったぜ。死に際に、おれに言ったんだ。「……悲しむことはない。死なんてものは、しばしの別れだ。なにも恐れることはない」ってな。……あいつは、まさしくヒーローだったよ、最後まで。

赤石　そうか。……でも、いいのか。こいつの前で、そんな話……

藤木　いや、ショックを受けるだろうから隠しとこうと思ったんだけどね、彩子、全部覚えてるって言うからさ。

赤石　え？

彩子　当たり前だよ。彩子、赤ん坊の時から特別な子どもだったから。

藤木　ま……そうゆうことだ。……ブラックは、もういない。あいつの最期を見届けた時に、決めたんだ。おれが代わりに、この子の父親になろうってな。

赤石　……。

藤木　……悪いな、こんな話、するつもりなかったんだけど。……ま、他、あたってみるよ。預かってくれそうな人。……忙しいのに、すまなかったな、

赤石　……え……

藤木　行こう、彩子、

彩子　うん、

藤木　（式場係に）すみません、お会計。

藤木と彩子、立ち上がる。

式場係　……久しぶりだなあ、藤木。

藤木　え？

式場係　覚えてないか。……おれは、よーく覚えてるぜ？　お前たちのお陰で、おれは生徒会長の座を奪われたんだからな。

赤石　あ！　てめえ、中学ん時のいけすかねえ生徒会長！

藤木　あ……。

式場係　聞いたぜ？　お前、相変わらずらしいじゃねえか。どこ行ってもそのオッパイのせいでロクに仕事も続かねえって。そりゃそうだよなあ！　お前みたいな出来損ないの

化け物、好きで雇ってくれるようなとこ、ねえもんなあ！

藤木　どうしてそれを……。

式場係　こーゆう店やってると、入ってくんだよ、そういう噂が。……だけど、知らなかったぜ。出来損ないが出来損ないのガキ抱えて、みじめったらしく生き恥さらしてるなんてな。

赤石　てめえ、ガキの前で言うことじゃねえだろ！

式場係　お前は……赤石だったか？　やめとけ、こんな出来損ないに付き合ったって、時間の無駄だろ。お前も後悔してるんじゃないのか？　こんなオッパイ野郎とつるんだばっかりに、どうせクソみたいなしょうもない人生送ってるんだろ？

赤石、式場係に殴りかかる。

藤木、それを止めに入る。

赤石　藤木！　止めるな！　こいつ、一発殴らせろ！

藤木　いいんだ、バーミリオン、おれが……！

式場係　出来損ないのくせに！　お前らがおれの人生、めちゃくちゃにしやがった……！

彩子、式場係にツカツカと近寄って、思いっきりビンタを喰らわせる。

式場係　……。

藤木　彩子……

式場係　このクソガキ……！

赤石　止めろ！　五才のガキに、手ぇ出すつもりか！

式場係　ごさ……？！　……ちっ！　クソ共が！

式場係、去っていく。

藤木　……すまなかったな、バーミリオン。

赤石　ああ……いや……

藤木　なんか、迷惑かけちゃったな……悪かったよ。……行こう、彩子、

赤石　……待て！　ストップ！

藤木　え？

赤石　……いい。……わかった。わかったよ……お前がいねえ間、そいつの面倒、見てやる……。

藤木　……いいのか？

赤石　ああ。……でも、うちに預かるってのはダメだ。……その、嫁さんに色々疑われちまうからな。

藤木　だったら……？

赤石　仕事の帰りに、お前んち寄って、飯つくったりしてやるよ。どうだ？　何なら、そいつが寝るまで、ちゃんと見ててやる。いいだろ、それで。

藤木　　ああ。

藤木、去る。

藤木と彩子の家（過去）

白いハンカチで汗を拭いている彩子と、椅子に座って彩子の様子を見ている赤石。

彩子　……ねえ、バーミリオン。
赤石　なんだよ。
彩子　そろそろ、お家帰る時間じゃないの。
赤石　そうだけど……お前が眠くなるの待ってんだよ。さっさと布団入れ。
彩子　うーん……じゃあ、なんかお話、してよ。
赤石　お？　お前も案外、子どもらしいとこ、あるじゃないの。……何だ、何がいい？　桃太郎か？　かちかち山か？
彩子　うーん。
赤石　なんでもいいぞ、リクエストして。
彩子　じゃあ……バーミリオン、愛についてどう思う？
赤石　は？
彩子　奥さんのこと。ちゃんと愛してる？
赤石　……お話って……それ……？
彩子　うん。
赤石　……どうでもいいだろ、そんなこと。
彩子　どうして？　大事なことでしょ？　愛し合うって。
赤石　……うるせえ。とっとと寝ろ。
彩子　え。
赤石　ぽやーっとした顔しやがって。眠いんだったら、さっさと寝やがれ、
彩子　眠くないもん、別に。
赤石　嘘つけ。
彩子　……え、じゃあさあ、まだ出来るの？
赤石　なにが。
彩子　セックス。
赤石　……はあ？
彩子　まだセックスできるの？
赤石　当ったり前だろ！　ううか、セックスとか言うな。ガキのくせに。現役だ現役。三十代だぞ、まだ。
彩子　……（股間に触ろうとする）
赤石　バカ！　なにしてる！
彩子　確認。
赤石　触るなバカ！

彩子　だって、もう、すごい長さになってるでしょ。
・・・
赤石　……どうしてそれを……？
彩子　ウィスタリアから聞いたよ。
赤石　バカな。あいつは、知らないはずだ……これのことは…。
彩子　ううん。中学の時から知ってたって。……生徒全員のおかしなとこ、探してたんでしょ？
赤石　まさか。いや……しかし……。
彩子　でも、そうなんでしょ？
赤石　……そうさ。……きっと、世界最長だぜ、おれのチンコは。今や、殺人的な長さだぜ。一年に十センチは成長してる。しかし、あいつ、知ってたとはな……。おれは立ちションなんか、したことなかったし、水泳の授業は毎回バックれてたんだが……。
彩子　それ……どうなってるの……？
赤石　右足に、こう、ぐるぐる巻きつけてんだよ。
彩子　ええ。気持ち悪い。
赤石　うるせえ。……まあ、女どもは喜ぶさ。でも、こっちは体力使うんだ。びったんびったんするからな。
彩子　大変なんだねえ……。
赤石　ふん。藤木のこと言える立場じゃねえ。鏡を見る度に思うんだ、おれも出来損ないの化けモンじゃねえか、って。最近じゃあ、これに群がってくる嫁さんや女たちも、化けモンに見えてくる……。だから、いいんだ。愛なんか。化けモンは化けモンらしく、人目につかないとこで、孤独に生きてかなきゃいけないんだよ。
彩子　……ねえ。じゃあ、彩子、バーミリオンの子どもになってあげてもいいよ。
赤石　……はあ？
彩子　ブラックは、二人のヒーローだったんでしょ？　だったら彩子、二人のヒロインになってあげるよ。彩子、ブラックの代わりにならないと……代わりに生まれてきたんだから……。
赤石　なに言ってんだ、お前？
彩子　……だめ？　バーミリオンと、ウィスタリアと、ブラック。三人が、彩子のお父さんなの。
赤石　お前なにを突然……なあ、なんか顔赤くねえか？　お前。
彩子　……え？
赤石　（彩子の額を触って）おい。……おい、おい、おい……。
彩子　うん……？
赤石　……マジかよ……（どこかへ行こうとする）
彩子　なに、どこ行くの？
赤石　救急車……いや、タクシーでいいか。ちょっと電話借りるぞ、
彩子　え？
赤石　お前……すごい熱だぞ。病院行こう、

彩子　いい。
赤石　ああ？
彩子　病院、行きたくないよ。
赤石　なに言って……
彩子　あんまり好きじゃないから。
赤石　はあ？
彩子　……だって、病院って、ひとが死んじゃうところでしょ。
赤石　……違うよ……病院は、ちゃんと病気を治してくれるところだ。
彩子　いい。……バーミリオンがいてくれたら、大丈夫……。
赤石　（客席に）彩子は、一週間、高熱を出し、その間おれは付きっ切りで看病しました。会社を休み、家にも帰らず、彩子の額の汗を拭いてやっていると……これまで付き合った、どの女にも抱いたことの無かった感情が込み上げてくるような気がしました。……できることなら、代わってやりたい。……なんて、どうしてそんなことを思ったのか。自分でも、よくわかりません。
彩子　（客席に）やっとのことで熱が引くと、私は甘えることを覚えてしまったのか、それとも、高熱で脳細胞が死んでしまったのか……段々と普通の子どもらしくなっていきました。
赤石　おいおい、お前も喋っちゃうの？
彩子　うん。……ダメ？
赤石　いや、これ藤木の走馬灯だから……お前まで入ってきちゃうと、ややこしいことにならない？
彩子　だって長いんだもん。ちゃっちゃと済まそうよ。

藤木、お洒落な私服を着て現れる。

藤木　いや、ちゃっちゃと済ますなよ、おれの走馬灯。
赤石　（藤木の服を見て）お？　なんだよ、似合ってるじゃない、
彩子　（客席に）普通の子どもになってしまった私は、それでもすくすくと育っていきました。お父さんから生まれて、お父さんとお父さんに育てられて……。全然普通の家族じゃなかったけど、思い出すのは、どこにでもあるような、ありふれた家族の思い出ばかりです。

ギターを抱えた式場係（黒のネクタイをしている）が現れ、三人に一礼する。
藤木と赤石と彩子、式場係のギターに合わせてビートルズの『ガール』を歌う。

彩子　（歌うのを止めて）ウィスタリア、バーミリオン、今度の土曜日、なにしてる？
藤木　土曜日？
彩子　授業参観、あるんだけど、
赤石　やだよ、授業参観なんか。
彩子　えー。来てよ。彩子、算数得意なんだよ。

赤石　この年になってまで学校なんか行きたくないよ。恥ずかしいじゃない。

以下、式場係の歌に合わせて、走馬灯が進行する。
彩子は時間の経過と共に、次々に衣装を着替える。
小学校の教室。
席に座っている彩子と、教室の後ろで授業参観に来ている藤木、赤石。

彩子　（周りをキョロキョロしている）
赤石　なんだよ、こんな問題もわかんねえのかよ！
彩子　（赤石の方を振り返る）
赤石　彩子、彩子、手ェ挙げろ！
彩子　……（手を挙げる）
藤木　あ、当てられたぞ。

彩子、立つ。
しかし、答えられない。

赤石　分かんねえのに、手ェ挙げんなよ！
藤木　お前が挙げろって言ったからだろ！
赤石　彩子、六だ！　六！　答えは六だ！
藤木　お前が答えてどーすんだ。
彩子　……。

藤木と彩子の家。

彩子　ウィスタリアもバーミリオンも、もう学校来ないで！
赤石　えっ。なんでだよ。
彩子　だって、授業参観の時も変なことするし、運動会の時だって、すっごい笑われたんだよ。
藤木　え？　頑張っただろ、おれたち。
赤石　そうだよな？　あの二人三脚で、おれ、ちょっと筋肉痛になっちゃったよ。
彩子　おっさん二人でモタモタして。すっごい恥ずかしかったもん。お前の家族、おかしいって言われたもん。
赤石　まあ、それ言われちゃうとなあ……。
彩子　ウィスタリアもバーミリオンも、もう嫌い。
藤木　彩子ぉ。
赤石　なあ、いい加減、バーミリオンって言うのやめないか？
彩子　え？
赤石　なんか、そろそろ他の呼び方にしてくれよ。
彩子　……じゃあ、なんて呼べばいいの。

赤石　……だからまあ、赤石さんとか……
彩子　えー。変だよ。それ。
藤木　お父さん。
赤石　……え。
藤木　お父さん、でいいんじゃないか。
彩子　……二人とも？
藤木　ああ、二人ともお父さん……ややこしいか。なら、おれのことはパパって言ってもいいしな、
彩子　えー。パパって感じじゃないなあ、
赤石　どっちかって言うと、おれがパパだろ？
彩子　えなんで？
赤石　いや……別れた女房にもパパって、
彩子　（遮って）でも、恥ずかしいよ。中学でお父さんのこと、パパって呼んでる子なんか、いないよ？

彩子、いつの間にかセーラー服を着ている。

藤木　あれ？　お前、中学生になっちゃったの？
彩子　そうだよ。
藤木　なーんか、すぐ、おっきくなるなあ……。
彩子　そ？
藤木　もっと、ゆっくりやってもいいんじゃないの？
彩子　えー。だって、退屈しちゃうよ？　聴いてる人、
藤木　え？
彩子　（客席に）本日は、私たちのためにたくさんの方にお集まりいただき、ありがとうございます。
藤木　ああ、そうか、これって……あれか。
赤石　おい、うるせえよ。静かに聞いてられねえのか。
藤木　悪い悪い、スピーチだったな、結婚式の。
赤石　ったく、死んでまでゴチャゴチャうるせえと、たまったもんじゃないぜ。
藤木　え……？

数年後。藤木と彩子と赤石の家。

彩子　ねえねえ、明日、友だち連れて来てもいい？
藤木　ああ、いいよ。
彩子　うちで一緒にご飯食べてもらおうと思ってるんだけど、ダメ？
藤木　まあ、大したものは用意できないけど。
赤石　おう、誰だ？　紗也香ちゃんか？　あの子、いいよなあ。キツそうで。
彩子　キモ！　……最悪。ロリコンじゃん。

赤石　十六超えたら全員女だよ。
彩子　キモい……。もう絶対、紗也香連れてこない……。
赤石　そりゃあないぜ。
彩子　お願いだから、変なことしないでね。康介君に変な家族って思われたくないから。
藤木　康介君？
彩子　……明日来る友達。
藤木　友達って……男か！？
彩子　そーだけど。……何人かと来るし。別に、そうゆうのじゃないから。
藤木　なんだ、おんなじ高校の奴か？　どういうアレだ？　え？
彩子　部活の先輩だよ。うるさいなあ。
藤木　お父さん、聞いてないぞ。男の友達がいるなんて。
赤石　おい。お前、ちゃんとアレ着けてもらってるか？　避妊だけは絶対しろよ？
彩子　あー。ほんと最悪。

数年後。藤木と彩子と赤石の家。旅先から帰ってきた三人。

藤木　よっこいしょ。ただいまー……。
彩子　ただいまー……。
赤石　おーい、彩子、風呂入れてくれえ。
彩子　えー。ひと休みさせてよお。
赤石　バカ。ずうっと運転してたんだから、ちょっとは労われ。
彩子　私が運転するって言ったじゃん……。
赤石　あんなもん、乗ってられるか。なんでまっすぐしか行けないんだよ。よく免許取れたな。
藤木　いやあ……気取った旅館もいいけど、やっぱり家のソファーが一番だなあ……。
彩子　ええー……。
赤石　そう、そう。でっかい風呂って、なんか落ち着かないんだよな。
彩子　連れてった甲斐、無いじゃん……。ボーナス全部使ったのに……。
藤木　いいんだよ、おれたち、贅沢なんか似合わないから。お前が結婚して、子ども産まれたら、色んなとこ連れてってやれ。
彩子　えー。でも、怒るでしょ。お父さん。私が結婚するって言ったら。
藤木　なにそれ？　怒らない、怒らない。
彩子　うそだね。昔、連れて来るって言ったら、すっごい怒ってたもん。
赤石　ああ、そうだな、怒ってた。
藤木　えー。怒ってないよ。
彩子　……え、じゃあ、会ってくれる？
藤木　なに？
彩子　……今度、連れて来るから。お父さんたち、会ってくれる？
藤木　い、いるのか？
彩子　ほら、やっぱ怒った。

藤木　い、い、いや、怒ってないけど。言ってよお。……お父さん、心の準備、全然できてないよ。

数十年前。夕方の公園。
赤石はいない。
さっきまで彩子がいた場所に、幼い頃の闇原が立っている。
学帽をかぶって短パンを履いた闇原、顔を覆って泣いている。

闇原　……藤木くぅん。

・・・

藤木　あれ？　お前……有ちゃんじゃないの？

闇原　……。

藤木　なんだ……また、いじめられて、泣いてんのか。大丈夫だよ。はは。鼻水出てるぞ。……こんな昔のことまで思い出しちゃって……。やっぱり、彩子見てると思いだすのかなあ。ほんと、そっくりなんだよ。お前の娘。……お前に、見せてやりたかったなあ、あいつのウェディングドレス姿。

闇原　……。

藤木　泣くんじゃないよ。お前、かっこ良かったんだよ。最後まで。泣き虫有ちゃんって言われてたのが嘘みたいだ。お前、おれたちのヒーローだったんだよ。

闇原、にっこりと笑って、歩き出す。

藤木　おい。どこ行くんだよ、有ちゃん。……おい。

闇原、笑顔で振り向く。

闇原　なアに。死なんてものは、しばしの別れだ。……何も怖がることはない。

闇原、姿を消す。

藤木　そうか……そうだな。ま、おれも、すぐ、そっち行くよ。

・・・

演奏を終えた式場係、去る。
藤木の走馬灯が、消えていく。

斎場・控え室（現在）

冒頭の結婚式場に似た場所。
藤木、クローゼットの中の服をかき分けて、なにかを探している様子。

そこへ、モーニングスーツに黒のネクタイを締めた赤石が入って来る。

赤石　おい。……まだかよ？
藤木　……ん？
赤石　いや、もう始まるぞ。
藤木　うん、わかってるんだけどね……
赤石　なに。
藤木　……ネクタイ知らない？
赤石　……え？　無いの？
藤木　……うん……
赤石　無いことないでしょ、探せよ。ちゃんと、
藤木　探した、探した。さっきから探してるよ。
赤石　もっかい。思い出してみ。最初っから。
藤木　……最初に、こう……こっから出しただろ……。それで、ここにまとめて……それからこっちに行って……あれえ？
赤石　……ねえ、もう着けてるじゃない。
藤木　え？
赤石　ネクタイ。もう、してるでしょ。
藤木　ああ、ほんとだ。なんだあ。
赤石　なんだじゃないよ。なんでおれが逐一お前に指示しなきゃいけないの？
藤木　はいはい、ごめんごめん。

喪服を着た彩子、現れる。

赤石　……おう。
彩子　……。
赤石　康介君は？
彩子　仕事終わったら、来てくれるって。
赤石　ああそう。……しかし、こんな変な葬式、大丈夫かね？
彩子　え？
赤石　いや、おれが喪主っておかしくないか？
彩子　うん。……おかしい。
赤石　おかしいよな。
彩子　……まあ、でも、いいんじゃない。
藤木　ねえねえ、
赤石　なんだよ。……今、忙しいんだよ。お前のせいで。
藤木　ごめんごめん。右足出して、左足、だっけ？
赤石　違う、右足出して、揃えて、左足だよ。
藤木　ややこしいねえ。
赤石　ややこしくないだろ、全然。

藤木　こんなもったいぶって歩くの、ちょっと恥ずかしいよなあ。
赤石　だったらお前はいいよ。おれ一人で歩いてやるから。
藤木　いやいや、そうゆう意味じゃなくてさあ。
赤石　だってお前、もう死んじゃってるんだよ？
藤木　……死んだって歩けるよ。付き合ってくれよ。

音楽。
赤石、藤木、彩子、客席の花道へ歩いていき、舞台上から姿を消す。
客席に式場係が現れ、観客にアナウンスをする。

式場係　皆様、大変お待たせいたしました。間もなく新婦・彩子さんが、お父様の赤石修二さまと、……お父様の藤木博貴さま、お二人のエスコートで入場いたします。

赤石、藤木、彩子、客席の花道を、ぎゅうぎゅうになりながら舞台の方へ歩いてくる。
以下、歩きながら。

藤木　ああ……なんか……ちょっと泣けてきちゃったよ。
赤石　早いよ、あとにしてよ。
藤木　まさか、こんな日が来るなんてなあ……。
赤石　早いって、せめてスピーチで泣け。
彩子　うるさい、うるさい……
赤石　……せまいな、くそっ。
藤木　なあ、バーミリオン。いいのかなあ？
赤石　なにが。
藤木　出来損ないのおれたちが、こんなに幸せでいいのかなあ。なんか、バチ当たったりしないかなあ……。
赤石　へっ。なんだよ、それ。

藤木、立ち止まる。

彩子　……あれ？　お父さーん？
藤木　（鼻水や涙を拭っている）ごめん、やっぱりダメだ。ちょっと、休憩させて。
赤石　バカ。休憩なんか無えよ。ちゃっちゃとついてこい。

赤石と彩子、バージンロードの先で待つ、彩子の夫に一礼する。
赤石、彩子の手を取って、彩子の夫の手の上に重ねる。
赤石と藤木、彩子を見守る。

彩子　（客席に）……皆様、本日は、父のためにたくさんの方にお集まりいただき、ありがとうございます。多くの方に見送られて、父も、さぞかし喜んでいることと思い

ます。私には父が二人、いえ、三人おりました。三人のお父さんと一緒に、バージンロードを歩くことができたら、どんなに幸せだったでしょうか。……父ひとり、娘ひとりでバージンロードを歩いてみると、まるで、どこにでもいる普通の家族のようで……なんだか、少し寂しく思います。父から生まれて、父と父に育てられて。そんな、普通じゃない家族の中で育った私は、どこにでもいる、普通の男の人と……康介さんと、結婚します。イケメンでもなく、お金持ちでもなく、オッパイもなくおチンチンも長くない、普通の男の人です。普通の家族が、どうゆうものか、私には分からないけれど、きっと、幸せになってみせます。お父さん、お父さん、これまで育ててくれてありがとう。私は、これからもずっと、お父さんたちの娘です。

以上……親族代表、闇原彩子。

いつの間にか、藤木の姿は消えている。

暗転。